



あっさり黙示録

18 『メシアを産む民族イスラエルの陣痛』

黙示録 12 章

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏



お元気ですか。高原剛一郎です。あっさり黙示録第 18 回目。
また皆さんと一緒に見ることが出来ますことを、とっても喜んでおります。

今日は黙示録 12 章から解説しますが、その前に大まかなことをお伝えしておきたいと思います。
黙示録の預言の大部分は 7 年間の艱難時代に関する預言で、終末預言について詳しく書いてあるのが黙示録だと言えるでしょう。

終末預言は基本的に時系列で書いてあるのですが、4 回だけ中断して挿入箇所があります。
挿入箇所では、これから展開する預言を分かりやすくするために、前もって登場人物たちを解説し、その知識を授けるんですね。

12 章～14 章は第 3 回目の挿入箇所です、ここに 7 種類のキーパーソンが出て来ます。
このキーパーソンを前もって頭に入れておくと、今後の終末預言、特に艱難時代後半 3 年半の一番厳しい時代がこれから展開しますが、その預言がよく分かるようになります。

12 章～14 章は情報量が非常に多いので、あっさり黙示録ですが、ちょっと細切れにやりたいんです。
あんまりあっさりだと情報量が多すぎて、却って分からなくなるんじゃないかと思うので、少しずつ見て行きます。

黙示録 12 章

1 また、大きなしるしが天に現れた。一人の女が太陽をまとい、月を足の下にし、頭に十二の星の冠をかぶっていた。

2 女は身ごもっていて、子を産む痛みと苦しみのために、叫び声をあげていた。

一人の女は、結論から言うとイスラエル民族のことです。

彼女のコスチュームは非常に特徴的で、着ている物は太陽、足の下に敷いている物は月、頭に被っているのは 12 の星の冠。太陽と月と星に囲まれている一人の女。これは何を意味するのか。

聖書は聖書で解釈しなければなりません。特に黙示録は聖書の最後の書物なので、黙示録以前に書かれた聖書の記述を読者が知っている、ということ的前提に書かれているんですね。

太陽と月と星は、旧約聖書の創世記 37 章に出て来るんです。

族長ヤコブが溺愛する息子ヨセフが夢を見て、それをお兄さんやお父さんに報告する内容です。

9 再びヨセフは別の夢を見て、それを兄たちに話した。

彼は、「また夢を見ました。見ると、太陽と月と十一の星が私を伏し拝んでいました」と言った。

さあ出ました。太陽・月・星。いったい何を意味するのでしょうか？ 父ヤコブがすぐに解説しています。

10 ヨセフが父や兄たちに話すと、父は彼を叱って言った。

「いったい何なのだ、おまえの見た夢は。私や、おまえの母さん、兄さんたちが、おまえのところに進み出て、地に伏しておまえを拜むというのか。」

ここでハッキリと解き明かしていますね。

太陽は父ヤコブ、月は母ラケル、星たちはイスラエル（*ヤコブ）から出た族長たち/息子たち。これが頭に入っているという前提で、先ほどの箇所が出て来るのです。

太陽をまとい ⇒イスラエルの先祖たち・族長たち、アブラハム・イサク・ヤコブに与えられている約束を身にまとっている民族ということ。

月を足の下にし ⇒母親を踏みつけにしている、という意味ではありません。

黙示録はギリシア語で書かれていて、足はポドウン（複数形/両足）。両足の下は月。

月に支えられている・依って立っている。すなわち、イスラエルは父たちに与えられている約束を身にまとっているけれど、それだけでなく、多くのイスラエルの父祖の妻たち・お母さんたちの祈りによって支えられてきた民族ということ。

族長たちの出生の由来を見ると、彼らはしばしば不妊の女性から生まれたり、妊娠中に混乱があつて、「どうしたものかしら」と悩み、神に向かって祈る中で生まれて来たのです。

母親たちの涙の祈りの結果与えられた子供。そんな歴史がイスラエルの族長時代にあるのですね。

十二の星 ⇒イスラエルの12部族。

ところで、一人の女がイスラエルであるというのは、ヨセフの夢を通して初めて分かることなんです。なぜヨセフの夢を使ってイスラエルを表現しているのでしょうか。

ヨセフは、全世界が7年間にわたって大飢饉に襲われるという夢を見るんです。

彼は前もって世界的大飢饉を知らされていたので、エジプトにそのための準備をさせるんですね。

エジプトには食べ物がたくさんあるという状況の中で、7年間の大飢饉を通して、イスラエル（*ヤコブ）の息子たちが悔い改めていく。これが創世記の最後の部分のクライマックスなんです。

それと同じように、7年間の艱難時代は全世界に及ぶことです。

特にイスラエルに酷い苦痛がありますが、それを通して、イスラエルは自己義認の心が砕かれ、霊的に回復する。イエス・キリストを自分たちのメシアとして信じるようになる。

その預言が黙示録の結論の部分です。なので、ヨセフの夢がここで引用されていると考えます。

さて、一人の女。カトリック教会ではイスラエルだと解釈してません。処女マリアだと言っています。カトリック教会では、マリアは別格の人、天における偉大な存在、崇拜の対象と言っているでしょう。なので、一人の女はマリアだと解釈なさるのですが、マリアではありません。

2 女は身ごもっていて、子を産む痛みと苦しみのために、叫び声をあげていた。

カトリックの教理では、マリアは無痛分娩で出産したことになってるんです。
なぜなら、産みの苦しみは罪の結果女性に与えられたものだ、と聖書は語っているからです。
エバが罪を犯した時、神はエバに「あなたは苦しんで子を産む」と言われました。

しかしカトリック教会は、マリアは罪が無い女性/無原罪の女性だと教えているので、陣痛があったらおかしくなる。そこで、マリアは産みの苦しみをしていない、という教えなんです。
だけど、子を産む痛みと苦しみのために、叫び声をあげていた。酷い陣痛があったわけです。
ですから、これはマリアではないんですね。

いずれにしても、イスラエルはメシアを産み出そうとする直前 非常に苦しい状態にある、ということをごここで語っています。

イエスが到来する時、イスラエルは実質的にローマのコントロール下に置かれていました。
イスラエルにはヘロデ大王という王様がいるにはいたけど、ユダヤ人じゃなかったんです。
イドマヤ人/エドム人/エサウの子孫だったんですね。

一般のユダヤ人たちは、ヘロデ大王を王として認めていません。
そこで彼は、ユダヤ人たちの歓心を得ようとして大きな神殿を建てました。
それだけでなく、何人も奥さんを持っていたのですが、ユダヤ人女性も妻にしたんです。
これによってユダヤ人の仲間入りができると思ったのですが、一般民衆はどう考えたでしょうか。
「ユダヤ人女性から生まれた息子たちはユダヤ人だけど、ヘロデはユダヤ人じゃない。」
それで、自分の息子たちをライバル視したヘロデ大王は、息子を2人とも殺してしまいました。

では、イエスが到来する頃のイスラエルの信仰は、どんなものだったのでしょうか。
これがまたね、聖書からかけ離れた“ラビ的ユダヤ教”と言われているもので、戒律だらけ。
聖書の本来のメッセージとは、似て非なるものになってしまっていたのです。
その最大の原因は、旧約聖書以外に、旧約聖書と同じ権威を持つものとして、人間の意見を持って来てしまったんですね。それを“口伝律法（くでんりっぽう）”と言います。
この戒律だらけの教えのために、ユダヤ人たちは非常に苦しんでいました。

政治的にも苦しい。宗教的にも苦しい。

女は身ごもっていて、子を産む痛みと苦しみのために、叫び声をあげていたとあるように、イエスはイスラエルが最も苦しんでいた時代に、慰めの子として登場したのです。

しかし、このイエスの登場を良く思っていない、いや、なんとかして抹殺しようとする強大な力を持つ存在がありました。サタンです。サタンについては次回お話しします。

黙示録、段々ややこしくなって来ましたが、バックナンバーを重ねて見ていただければ繋がりができるかなとも思いますので、ぜひこれからもお付き合いください。
チャンネル登録もお願いします。ではまた このチャンネルでお目にかかりましょう。さよなら！

☆使用した聖書は「聖書 新改訳 2017」です。